



令和3年11月29日

#### 平良漁港

上甕島と中甕島の間の中島という無人島があり、この島を経由して2つの橋が架かっている。上甕島と中島の間が甕大明神橋（420m）、中島と中甕島との間が鹿の子大橋（240m）である。甕大明神橋は1993年3月に、鹿の子大橋が1990年3月に完成し、上甕島と中甕島が陸続きになって、28年以上が経つ。

上甕島から2つの橋を渡って、下甕島に抜ける県道351号鹿島上甕線を走り、平良<sup>たいら</sup>トンネルの手前を左折して坂を下り、平良の集落に向かう。

平良は島の北東に位置する。北西側は高い山が連なるため、風よけになり、冬季の季節風を遮る立地条件にある。集落の前面には平良漁港（第2種）が整備され、埋め立てにより、広い漁港用地がつくられている。漁港の東側は元々砂洲によって海と隔てられた湖沼であったが、1799（寛政11）年から3ケ年かけて開削し、きわめて静穏度の高い良港になった（湖沼は上甕島の長目の浜と同じような成因だったと思われる。甕列島には砂洲が多い）。このため台風時等の避難港になり、あるいは古くは貿易の中継地として繁栄したこともあったらしい。昔から「開かれた」集落だったのであろう。

集落の入口に旧船客待合所の建物である。橋の開通によって中甕島の平良と甕島各港をつなぐ航路が廃止になり、不要になった待合室は現在、倉庫として活用されている。

中甕島に来るのは2度目である。上甕村から受注した産業育成ビジョンでは、初年度に新たな事業としてアワビ養殖を進めることが決まり、引き続き2年目にアワビの籠養殖試験が平良港で行われることになった。それに伴い、試験現場を見に来たのであった。確か中甕島に住んでいる委員会メンバーに車で連れてきてもらった記憶がある。アワビの生残率は90%以上と好成績をあげたが、水温が上昇する夏季に成長が止まることが大きな課題であ

った。そのため、実際には事業化までは至らなかったようだ。

中甕島は上甕島の南に位置する面積 7.28 km<sup>2</sup>、周囲 17.4 km の小さな島で、上甕島の 1/6、下甕島の 1/9 ほどしかない。島のほとんどが急峻な地形で全島深い山で覆われ、標高 300m 近い山地が連なる。平地はわずかに平良の集落周辺に限られる。

こうした立地条件だったから、島の周囲を巡る道路はなく、橋ができるまではもっぱら海上交通に依存していた。島の道路は農地に赴くための山道があっただけだった。下甕島に橋を架けるために中甕島に道路がつくられることになったが、険しい山のため、県道 351 号の半分ほどはトンネルになっている。

漁港前に道を走り、集落の外れにある「民宿たいら」に入った。



平良の集落（左）、平良漁港の旧船客待合所（右）

## 民宿たいら

「民宿たいら」は集落の東端にあり、2階建である。観光客はあまり泊まっていないようで、仕事の客が主体という。この日の泊り客は私を含めて2人だった。

2階の階段の上り口に一番近い部屋に通された。すぐに風呂に入り、1階の食堂で夕食となった。スマ（地元ではホシガツオを呼ぶ）、イサキ、水イカの3種の刺身、コチの煮物、イサキの塩焼き、マオウダイのフライと水産物のオンパレードである。マオウダイとコチはご主人が朝、釣ってきた。水イカは大学生の息子が帰省した折に釣ったものを冷凍しておいたものらしい。つまり食材の多くは自家製というわけだ。ビールと「蔵の神」という焼酎を飲む。

夕食を食べながら女将と話す。彼女は本土側の鶴の飛来地として有名な出水<sup>いずみ</sup>から嫁いできた。ご夫婦は同い年の47歳で、19年前にUターンしたという。民宿のお父さんは10年前まで小型定置網を営む漁師だった。83歳になる現在も元気で、一本釣りといセエビの刺網をやっている。島には時々行商などの商人が訪れていたため、民宿はこの商人に宿泊場所を提供することがきっかけだったようだ。

話し込んでいるうちにご主人が勤務先から戻ってきて、同じ食堂で飲み始めた。彼は全国漁業協同組合学校出身で、卒業後、鹿児島県漁連に務めていた。その後、漁連をやめて島に戻ったが漁師にはならず、地元でサラリーマンになった。おそらく漁業で生計を立てるのは難しくなっていたのだろう。現在は上甕島にあるガス工事会社で働いている。じつは翌日、下甕島の旧鹿島町庁舎で偶然再会した。庁舎では、恐竜ミュージアムの工事が進行中だった

ので、ガスの配管の仕事で来ていたのだろう。

中甑島と下甑島をつなぐ甑大橋は 2020 年 8 月に開通しているが、橋の完成によって観光客は増えたそうだ。

漁業の方は、水温上昇の影響を受けて、ハガツオ、スマは釣れる期間が長くなっているという。以前の漁期は夏前までで終わったそうだが、最近は秋口になっても釣れるようになり、今年は今でも釣れるらしい。



民宿たいらの外観

令和 3 年 11 月 30 日

### 甑島漁協下甑支所

朝 7 時から定置網の水揚げが始まるというので、朝食を食べてすぐに民宿の対岸にある甑島漁協の上甑支所に出かけた。支所の前では 7～8 人の年老いた漁師がカンパチの活〆作業を行っていた。じつはこの日は時化で定置網を揚げられなかったようだ。代りに以前から蓄養していたカンパチを出荷するためにその処理しているところだった。

中甑島の漁業者は当初 1 島 1 漁協として平良漁協を組織していた。しかし、1994 (平成 6) 年に平良漁協と上甑村内の浦内、中甑 (中甑島ではなく上甑島になるので話がややこしい) の 3 漁協が合併して上甑村漁協となり、1 村 1 漁協に再編された。さらに 2003 (平成 15) 年 10 月に、里村、上甑村、鹿島村、下甑村の 4 漁協が合併して甑島漁協となり、甑列島の漁協は 1 本化された。それに伴い、平良に本所が置かれていた上甑村漁協は甑島漁協の上甑村支所となっている。

中甑島の正組合員数は 17～18 人で、若い人はいない。職員は正が 2 人、再雇用が 2 人、アルバイト 1 人の 5 人が働いている。ただし、平良での勤務は午前中だけで、午後になると正職員は上甑島の中甑出張所と浦内出張所に移動し、こちらに勤務する。



漁協の荷捌場 (左)、カンパチの処理をする乗組員 (右)

中甑島の漁業のメインは定置網である。漁協自営の大型定置網漁業が周年営まれている。ただし、台風時期は定置網は撤収するそうだ。従業員は 7 人で、全員が正組合員になっている。おそらくカンパチの活〆作業をしていたのが、従業員と思われる。何れも高齢者ばかりで、後継者はいないから、この先が危ぶまれる。長崎県の港勢調査によると、定置網の漁獲

物はブリ類がメインで、2017年の水揚げは49トン、2,700万円であったから、定置網の経営は厳しい状況が続いているものと推定され、若い漁業就業者の確保につなげていない。

定置網以外では、カジキの流網などの網漁業、一本釣、籠漁業などが営まれているが、水揚げは僅かなものだ。

## 平良の集落

漁協でカンパチの水揚げ風景を見学してから、漁港用地の脇につくられた道路を集落の入口の旧船客ターミナルまで歩く。途中で樹齢500年以上と推定されるエノキの大木があり、その脇にすべり台があった。ターミナルの隣に漁港公園が整備されていて、その裏手に恵比須神社が置かれている。神社の前で朝の散歩をしている私と同年代と思われる男性と言葉を交わす。

彼によると、平良地区の人々の生業は半農半漁だった。農地は、集落の入り口に比較的まとまった平坦地があり、ここで田んぼと畑がつくられていた。平地は絶対的に少なかったので、少しでも平らな土地があれば、農地として開墾したそうだ。うさぎ道と称する狭い山道を歩いて畑に行き、耕作して収穫物を背負子で運んだ。集落背後の裏山はもちろん段々畑として活用したという。春は麦、夏はサツマイモをつくる二毛作だった。しかし今は当時の面影は全くなく、もとの森林に戻っている。

漁業は現金収入源として重要であったが、当時は船のスピードが遅かったため、本土に鮮魚として出荷することはできなかった。そのため、イワシなどの多獲性魚は島で煮干し（イリコ）に加工して出荷した。

台風さえ来なければ住みやすいところだったという。

伊能忠敬が測量に訪れた頃の世帯数は172戸といわれているので、古くから人が住んでいた。当時、矢島と呼ばれていたようだ。



集落を貫く一本道（左）、空家になっていると思われる古い家（右）

島の人口は団塊の世代が小中学生だったころがピークであった。1965年の国勢調査時の人口は917人。当時の1世帯当たりの人口は4人強であったから、世帯数は230戸ほどと推定される。50年後の2015年の国勢調査では、人口は224人、世帯数は137戸であったから、人口は半世紀の間に1/4に減少した。世帯数はおよそ1/2になったと思われる。2015年国勢調査時の就業者数は108人なので、人口の約半分は働いていないことになる。職業別では医療福祉が17人で最も多く、これに漁業（16人）、建設業（14人）、卸売・小売（13

人)と続く。農業はゼロであり、漁業の占める割合も昔より大きく低下している。

集落の中心部を貫く一本道を歩き、集落を観察した。恵比須神社から直線の道路が北西から南東へと伸びる。これから通学すると思われるランドセルを背負った小学生が歩いていた。これからスクールバスに乗るのだろう。古い家は瓦屋根と板張りで四角い形をしているが、一方比較的新しい家は台風の影響を避けるため鉄筋コンクリートの2階建である。すでに空き家になっていると思われる古い家も目立つ。

家間の空き地や集落背後の山際のまとまった土地では家庭菜園がつけられていた。周囲をネットで囲っている畑も見られる。ただ、厳重な囲いではないので、恐らくイノシシは島に生息していないと思われる。畑にはダイコン、ジャガイモ、タマネギなどが植えられていた。

### 正浄寺と墓

一本道のほぼ中央あたりの左側に郵便局があり、その反対側に正浄寺という浄土真宗本願寺派の寺がある。1881(明治14)年の創建というから比較的新しい。

薩摩藩は1597(慶長2)年に一向宗つまり浄土真宗を禁制としているが、にもかかわらず甕島には同宗の寺が多い。この正浄寺を含めて6つもある。それだけ島の人たちの信仰が篤かったのかもしれない。

正浄寺から山の方に向かうと、区画化された霊園があった。1976(昭和51)年7月に完成したものである。おそらく集落内に分散していた墓地を一ヶ所にまとめたものと思われる。各区画は全く同じ面積で、家による格差はない。区画数は200ほどあるが、すでに墓石が撤去されている場所も目立つ。島外に移住し、墓を改葬したのだろう。

民宿の女将の話では、最近、過疎と高齢化が進み、墓の管理ができなくなっている家も増えてきたため、お寺の中にそういう人たちを供養する納骨堂ができたそうだ。

過疎が進んだ島の特徴ともいえるが、路上にはあちこちで猫を見かけた。



中甕島の唯一の寺・正浄寺(左)、きれいに区画化された霊園(右)

### 旧平良小学校

霊園のさらに山側、集落の背後の一番高いところに旧小中学校が置かれていた。小学校と中学校の校舎が別々にあり、その中間に体育館が建つ。校舎の山側に小さな校庭があり、その中央にセンダンの巨木が枝を広げている。

平良小学校は1876(明治9)年に寺子屋として創設され、1893(明治26)年に平良尋常

小学校になった。その後、1926（大正 15）年に現在地に移転している。しかし 2011（平成 23）年 3 月に上甕島中甕地区にある中津小学校に統合されて閉校になり、120 年の歴史に終止符をうった。中学校はこれに先立つ 2001（平成 13）年に上甕中学校に統合されて閉校になっている。つまり現在、島には小中学校がない。

なお、センダンの木は前の校舎にあったものを 1926 年に移植したもので、すでに 100 年以上を経過した古木である。校庭の中央に木があると、球技等をやる時に邪魔になるから、このような例は見たことがない。おそらくその不便さ以上にセンダンの木に島の人々の思い入れがあったのだろう。

校舎の前に「ありがとう平良小学校」と書かれた閉校を記念する石碑が建っていた。子どももの立像が置かれ、脇に小中学校の沿革が書いてある。記念碑の前に立ち、ボタンを押すと小学校と中学校の校歌が流れてきた。

現在島には、中学生 1 人、小学生 2 人、幼稚園児 1 人の合計 4 人と未就学児や赤子もいる。小中学生はスクールバスで上甕島まで通う。中学校は上甕島中甕地区にあった上甕中学校が 2019 年度末で閉校になったため里地区にある薩摩川内市立里中学校へ、小学校は中甕地区にある市立中津小学校にそれぞれ通学している。



旧中学校の校舎（左）、グラウンドの中央にあるセンダンの巨木（右）

## カノコユリ

民宿から湖沼を開削してつくられた漁港をぐるりと先端まで歩ことにした。

民宿のすぐそばに三島神社がある。1635（寛永 12）年ごろに建てられたといわれており、ご神体は仏像で、神仏習合であった。廃仏毀釈後に三島神社になったそうだ。続いて漁具倉庫、漁業集落排水の処理施設などが道路を隔てた海沿いに並ぶ。

外海に面するあたりに小さな山があり、そこに愛宕神社が置かれていた。赤い鳥居をくぐり石段を登っていくと、三方をブロックで囲い、屋根のある小さな社があった。ご神体は石で、長方形の石の上に細長い自然の石が置かれている。石の前には男女の西洋人形が供えられていた。ご神体は外国のもののように、航海安全を祈願するために祀られたとされている。

境内には立ち枯れしたカノコユリがたくさん見られた。カノコユリは 6～8 月に花を付け、その後枯れて種子を散布する。開花期に訪れていれば、さぞかし美しい風景がみられたであろう。境内にカノコユリが多いことから球根を掘って、持ち帰る人がいると見え、「球根採掘禁止」と書かれた立看板が置かれていた。

カノコユリは九州や四国に自生するユリで、九州の中では甑列島に高密度に分布することが知られている。特に中甑島には多いとされる。このユリは明治から昭和初期にかけて欧米に輸出され、島の重要な現金収入源になっていた。11月の初めに球根を掘って出荷した。なおユリの球根は救荒食としても貴重だったらしい。

中甑島ではユリへの日当たりを良くするため12～1月にかけて山を焼き払うことが行われていた。カノコユリは2月ごろに芽吹くが、周りに光を遮るものがないからすくすくと育った。人が自然に手を加えることにより、カノコユリの高密度分布を可能にしたのである。雑木林の下草を刈り、落ち葉を取り除くことがカタクリの高密度化を促したのと同じ理屈だ。

愛宕神社の漁港とは反対側は磯になっていて、対岸に上甑島が横たわる。愛宕神社の先へと進むと、2000年以上前に開削した水路に出た。水路の幅は20mもないだろう。風がかなり強くなっていたが、港の中は全く静穏である。外海は一部が埋め立てられコの字に防波堤がつくられていた。この湖沼を開削した港は当時、南九州屈指の良港で、避難港としてあるいは密貿易の基地としてにぎわっていたようだ。

民宿の前まで戻り、路上に停めておいたレンタカーに乗り、中甑の山に向かう。



愛宕神社の鳥居と石段（左）、境内に自生する立ち枯れしたカノコユリと球根採取禁止の看板（右）

## 林道と展望台

平良漁港から県道に戻る途中から左に曲がる坂道があり、ここから島の中腹を周回し、鹿の子大橋に至る林道が整備されている。たぶん甑島大橋の開通後に島を訪れる観光客に「風景という観光資源」を提供することを狙って整備されたに違いない。林道は細く曲がりくねっているが、全線舗装されているので比較的走りやすい。

島の最高峰は帽子山の296mである。曲がりくねった細い道を登ると、帽子山展望所に出た。林道脇から階段が整備され、展望所には東屋がつけられている。周囲の草はきれいに刈られ、整備が行き届いている。それもそのはずで、指定管理者・昌和建设株式会社と書かれた立て札が立っていた。甑列島は、ここ四半世紀の間に道路、トンネル、橋を次々に建設し、島の経済は建設業で維持されてきたわけだが、甑島大橋の開通をもっておそらく大掛かりな工事は終わりであろう。膨れた地元の建設業を維持し島の雇用を守るためには、建設業者に、一定の仕事を与えなければならない。そんな事情が指定管理者には見えてくる。税金がかかるがやむを得ないのだろう。

展望所からの眺望は素晴らしく、眼下に平良の集落を一望できる。また上甑島の中甑や江石の集落を見ることができる。展望所の背後には帽子山がそびえていた。

ここから林道を10分ほど走ると、木の口山展望所に着いた。周回道路の最も南に位置する。かなり広い駐車場が整備されていて、橋を見物する観光客目当てに最近整備されたものと思われる。眼下には2020年8月に開通した甑島大橋を見ることができる。藺牟田瀬戸を挟んでその奥に下甑島が横たわる。

ここから林道は島のほぼ中央部を走る。やがてT字路にぶつかった。道を左折すると行き止まりになった。やっとのことで反転し坂を下っていくと鹿の子大橋の手前にでた。

橋を渡り、前日に続き再び上甑島を訪れる。



帽子山展望所（左）、展望所から平良の集落を望む（右）